

心はまことに不安な日々であった。しかしやがて落ち着きを取りもどし、平穩な捕虜生活を送ることが出来た。北関東出身者が多く、故郷を偲んでは民謡を歌い、だしものはいつも「暎の母」であり、「八木節」であった。

昭和二十一年三月、待ちに待った復員命令が来た。日本陸軍士官学校出身の蔣介石総統と何応欣將軍のきわめて人道的配慮から、在中国の陸軍は敗戦後もなんらの労役もなく、比較的早く帰国出来たことを忘れてはなるまい。

「洛陽」から無蓋貨車で数日をへて「上海」に到着、復員業務をおえ米国の輸送船に乗せられて中国をあとにした。やっと内地に帰れる、生きて帰れる。魚雷の心配もなかった。

二・三日の船旅だったろうか、内地の山々がみえはじめた。みんな甲板に出て涙を流しながら喜びあった。そして夢にまでみた日本の土地「博多」に上陸したのは昭和二十一年四月四日であった。

以上中国戦場でのごく一部を記録したが、戦争に明け暮れた青春の日々を懐かしむことと、戦争そのものとは

別問題である。戦争のあの悲惨さを知りつくした者こそが、最も戦争を嫌悪し、平和を願っている。

「親が死に、子が死に、孫が死ぬ」戦争は根底からこれをつくがえすものである。戦争のない恒久的な真の平和を願い、第二次世界大戦に倒れた多くの戦友のご冥福を心から祈るものである。

## 針の山

新潟県 金子富栄

馬といえば現在は競馬、乗馬クラブ、映画やテレビの撮影用としてしか用途が考えられないが、昔は労役、交通輸送用として、人間生活に欠くことの出来ない重要な存在であった。とくに軍隊にあっては、兵隊よりも尊重されたものである。

「お前たちは一銭五厘でなんにんでもひっぱってこられるが、馬はなん百円という大金がいるんだ」

と耳にたこの出来るほど聞かされた。事実、当時の軍

隊には馬は不可欠のものであった。今ならヘリコプターだが、作戦になると車両の使えぬ悪路難路や、山岳地帯の輸送連絡には馬による以外にすべはなかった。活兵器といわれたゆえんである。

昭和十九年、中国大陸で湘桂作戦が開始された。作戦前段の衡陽攻略戦には、第十三師団は左翼縦隊として、江西、湖南省境の山岳地帯を突破して、江西省方面から攻撃してくる敵をほそくせんめつするとともに、衡陽をうかいして南の来陽を確保し、粵漢鉄道をしゃだんして敵のたいろをたつ任務であった。

私は歩兵第一一六連隊三大本部行李の所属であったが、当時は兵員が少なく、また乗馬となる日本馬が少なくなっていたので、乗馬は行李長だけで、分隊長は徒歩のほか全員駄馬の馭兵であった。私は去る三月まで輜重兵第十三連隊に所属していたが、前年の常德殲滅作戦に出勤したときは、兵隊より馬のかずがはるかに多く、保安隊や苦力に駄馬をひかせなければならぬような状態だった。

五月下旬、湖南省の崇陽付近に集結した師団は、戦闘

開始で行動にはいるともう山岳地帯であった。最初にこえる峻険は暮阜山脈であったが、これは予想よりも安易だったのではと胸をなで下ろした。

つづいて六月にはいるともう長寿衛を占領した。ここはかつての贛湘、長沙の二回の作戦の戦禍に見舞われ廃墟と化したところだが、今は新しく再建され赤や緑の色が初夏の陽光に美しくはえていた。しかしここは師団長布告により城内にはいることをかたく禁じられていた。

部隊はここより三、四キロ進出して大休止、宿営となった。私達の宿舎の前には川が流れている。広くはない谷川で水はかれてほそく流れ、河原ができていたので、その河原に釜とびんをはこんでびん風呂をわかし、連日の疲労とあかを洗い流すことができた。びん風呂につきりこれから進むべき方向をみると、目前に万洋山系の山々がおおく高々とそびえ立ち、われらのゆく手を阻止しているように思われた。

やがて一同入浴を終り、爽快な気分楽しんでると急に命令がかわり、二十時出発と伝えられた。今夜は休めると思っていた喜びが破られがっかりし、口々に愚痴

をこぼしながらも出発準備にかかり、西の空がようやく暗くなりきるころ出発した。

出発するころは空は晴れて星が光っていたが、しばらくすると雲が出て星影は消えた。部隊はこの川にそって上流へと進んで行くのである。やがてポツリポツリと雨が降り出し、まもなく大降りにかわると、水のかれた川もみるみる水量を増し、ごうごうと音を立てて流れだした。

道路も少しづつ登りであることが感じられる。雨が篠つくように降りつづけると、行軍は遅々として進まなくなった。十歩進んではとまり、十五歩行つてはとまるという状態がつづいたが、やがて道路ぞいに五、六軒の家が並んでいるところに来た。その家のなかにたき火が明るく燃えている。その前にとまったので私はたづなをのばして家のなかにはいり、たき火のそばに寄った。火の明かりで馬をみると、眼をとじてじっと身動きもせず、頭をさげて雨に打たれている。私の馬は日本馬の駄馬なので、その姿がひときわ大きくうつつしだされあわれにみえた。

前の川はあふれんばかりに白波を立てごうごうと流れていく。

「おいみろよ」

と、そのとき戸口に立ってそとをみていた一人が呼んだので、戸口にて進行方向をみた。私は今まで足もとに夢中だったので気付かなかったが、目の前のおおいかぶさるやうな山に点々と灯がみえる。たいまつのおかりである。「この大雨のなかあの山に登るんだ、おそろしくなるなあ」とため息まじりにいったが、私もそら恐ろしいやうな気で背すじに寒いものが走った。

部隊はあがりたり歩いたり、かたつむりのようになるのと進んで行ったが、道路は川と別れて本格的な登りの山道にかわった。雨は降りつづいている。ほそい道路に雨水が集中して川になって流れていく。雨水が背中にかけたように携帯天幕をとおして被服をぬらし、寒さが身にしみる。やがて短い夜が空けて東の空が白んできたが、昨夜の登り口からは数百メートルほどしか進んでいなかった。

夜がすっかり明けると雨はようやく小降りとなり、や

がて止んだが、今度は難路が待ち受けていた。右側は山肌であり左側は目もくらむ千じんの谷底である。その谷底を激流となって流れる白い波の色がぶきみだった。蜀の棧道もこんなものであろうと思った。そのほそい道路の破損した箇所を、工兵隊が木材を用いて補修している。道路がほそくまたぜいじゃくとなり、足をふみはずした馬はもんどりうって転落していった。被服糧秣等はそのまま捨ててもやむをえないが、兵器は捨てることはできないので、砲馬や弾薬馬が転落すると、しめづなを幾本もつなぎあわせ、それに伝わって谷底におりていく姿がずいしょにみられた。

支那馬や驟馬はほそい道や難路悪路には歩き上手だが、日本馬はふえてである。日本馬の多い砲兵隊の馬の転落が多くみられた。私の馬も日本馬なので、大麥神經を使い疲労が大きかった。また道路のせまい箇所やくずれた箇所は、駄馬の積荷が山肌にふれて転落の原因になるので、その箇所は荷物をおろして裸馬で通し、荷物はかついで通過しなければならぬので、その苦心と苦労は筆舌につくせない。

曇り空からは時折りぼつりぼつりと雨が降ったり止んだりして日暮れとなったが、山の峻嶮と難路はいつ果てることもしれなかった。

日がとつぶり暮れると現在地に大休止となった。しかし一メートル半ほどの崖つぶちの道路上である。しかし馬が動けぬようにたづなを短く立木に結び、おろした荷駄に腰をおろして夕食となるのだが、昨夜の飯ごうはずでいかになっている。カンパンをだしあいひと握りづつわけてそれをかんでいると、大休止取消しただちに出発となった。

相変らずの十数歩行っては止まり、また歩きだすという状態だったが、寒さと空腹と眠気がおそうので、その方が停止して休むより結果的によかった。危険箇所はたいまつの明かりで誘導するなど、行軍の進むわけはない。短い夜も非常に長く感じられた。

ようやく夜が明けたが雨は大降りほしないが、止んだり降つたりの繰り返して、雨水は被服や編上靴をおおして頭から足の爪までぬれて、ぞっとするほど気持が悪い。昨日までの右側が山肌が、右側が崖と反対にかわっ

ていた。谷底は昨日より高くなり、崖の傾斜もゆるやかになり、中段が少し平らになっていた。しかし連日の雨で路盤がゆるんだためかはしがくずれたり、また疲労と衰弱で馬にも泳げる力がないのか、幾頭もが転落して途中の立木に引っかかったり、平の部分に止まったりしている。それを引きあげる兵隊たちは必死のぎょう相だった。

その夜も一睡することなく牛歩がつづき、東の空が白むころはふらふらと歩き、ときどき聞こえてくる銃声もなにか遠いところのできごとのようなうつろな感じだった。今日も雨である。携帯口糧のカンパンも牛缶もすでに食いつくし、空腹を通りこして名状しがたい状態であった。

炊さんする場所がないので、米は携行しているがたかことが出来ないのである。それからしばらく行くと崖したの平なところに、山賊のすみかのような家が二棟みえた。そこから煙があがっているので、分隊長が飯ごうを二個持っていきそこで飯をたいてきた。こな醬油をいれた醬油飯で、そのかおりで腹の虫が鳴き出すように思わ

れた。

その二個の飯ごうの飯を分隊長十人で分け、立ったまま食べたが、これようやく生気を取りもどすことができた。

それからまもなく頂上を越え、くだりにかかっていた。行軍速度も早くなり寒さがうすらいだが、今度は足の裏がしくしく痛み出し、その痛みが徐々に進んでいく。正午すぎになるとはげしい痛みで空腹を忘れてしまふ。まるで地獄の針の山を歩いているようである。あちこちに痛い痛いという声や鳴き声が聞こえる。小休止になるとぬれた地面に尻をおろし、両足を投げ出す。いく日も雨に打たれ、また水のなかを歩いたので編上靴のなかに雨水がしみとおり、熱のために足の裏がすっかりふやけきったのだ。しかし歩かなければならない。

全員うめき苦しみつづきつづけたが、十七時ごろようやく平地に出た。前方に街が見えてきたので、ここに大休止宿営になると思っただけだったが、この達湖という街を通り過ぎたのがっかりした。もう泣き声をあげているものもある。うめき苦しみつづきつづきようやく日暮れに

永和市に到着して宿宮となった。足が気づかわれるが、それよりもまず手わけして馬の始末、炊事が先決である。最後の勇を振るって手ぎわよく終り、たき火をかこんで編上靴をぬぎ足の裏をみた。真っ白にふやけ、いく筋もひだのようにはれあがっている。破れなかったのが不思議に思われた。少しさわっただけでも飛び上がるほど痛い。食事よりも被服の着干しと同時に足の裏をかわかすのがいそがれた。

「ああ息が止まるほど痛かったなあと、我々はもう地獄に行っても針の山をのぼらされるようなことはないだろうな。もうのぼったから」

と一人が言ったので一同笑いしたが、難行苦行はまだ始まりなのだと思い返すと、笑ってなどいられないのだと思いつき、急に笑いが止みしゅんとなった。

たき火は赤々と燃え火の粉がおそってきた。また雨が大降りになったのか、軒を打つ雨音がはげしく聞こえてきた。

## 浙贛作戦と内地部隊

千葉貞 新藤 榮 一

昭和十五年十二月一日、現役兵として近衛野砲兵連隊（東部第十二部隊）に入営し、約一週間野砲隊で不動の姿勢、敬礼、行進等の徒手訓練を受けた。のち、品川駅から軍用列車で神戸へ行き、国防婦人会の「暁に祈る」の大合唱に送られて、九千屯の輸送船に乗船して塘沽に上陸、北支天津の二九〇五部隊第二中隊に入隊した。

昭和十六年六月一日、甲種幹部候補生として新設された保定予備士官学校（旧軍官学校）へ第一期生として入隊した。昭和十六年十二月八日、大東亜戦争勃発し、区隊長以下学生が興奮の極であった。昭和十七年三月一日予備士官学校を卒業、見習士官として原隊の第六中隊へ復帰した。

昭和十七年五月十日、第三十二師団（楓）（済南）の歩兵一個連隊に山砲第二大隊（矢吹隊）が配属された。第